

Title	<研究論文>1事例研究再考：個を理解するということをめぐって
Author(s)	莊島, 幸子
Citation	教育方法の探究 (2008), 11: 17-24
Issue Date	2008-03-31
URL	https://doi.org/10.14989/190349
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

1 事例研究再考

——個を理解するということをめぐって——

荘 島 幸 子

1. はじめに—「ジェニーからの手紙」より

「科学においては一般に、個人は単なるわずらわしい偶発的なものとみなされている。心理学においても、事象の等質性を説明するという主たる仕事に着手するためには、個人は無視してもよいものとして扱われている。その結果＜一般化された人間の心＞といういささかぼんやりしたポートレートをつくることに熱中している心理学者をいろいろな方面でみることができる。しかしそこに描かれたものは、ある目的にはかなうが、これをそのモデルである生きている個人と較べようとするものにとってはまったく満足がいくというものではないのである」

（「ジェニーからの手紙—心理学は彼女をどう解釈するか」（1982）、訳者あとがきより）

上記の文章は、パーソナリティ理論における個人的記録の使用に関心をもち続けた心理学者のオールポート（Allport, G. W.）によるものである。この著作は、オールポートによる最後のまとまった研究であり、1937年に出版された“Personality: A Psychological Interpretation”（『パーソナリティー心理学的解釈』詫摩毅俊他訳、1982、新曜社）に展開されたパーソナリティ心理学の内容を具体例をもって示したものとされる。本書の前半部分では、ジェニーという女性が58歳から70歳までの間に出した301通の手紙とジェニーの背景、および手紙の受け取り手の1人であるイザベルがオールポートに向けて書いた手紙が読者に提示される。この手紙の魅力について、オールポートは次のように述べている。

「私にとってこの手紙の最大の魅力は、ジェニーを『説明』するうえで—それができたら—読者に（心理学者であれ素人であれ）に対する挑戦にあります。

知的な女性（ジェニー）がなぜそれほどまでにたえず自滅的に行動し続けたのか。いつどのようにすれば彼女は人生の悲劇を防ぐことができたのであろうか。適当な時期における適切な指導や治療は、かたくなな彼女の行為の道筋を変えるのに役立ったのであろうか。彼女の苦悩の原因はすべて無意識的な機構に根ざしていたのであろうか。もしそうなら、それはどのようなものであったのであろうか。ジェニーの人生のダイナミクスは真に不可解なものです。それは読者に対して自分の洞察を検証し、人間の本質に関する自分の知識を関連のあるところに適用するよう促しています。

そして人は尋ねるかもしれません。通常の心理学的用語はジェニーのケースにうまくあてはまるのか、と。ヒステリー、過保護、攻撃的、非社会的、孤立型、パラノイド、性格異常があるといったラベルを人は彼女に与えるかもしれません。しかしこうしたカテゴリーは、ひとつだけで、あるいはいくつかを組み合わせたとしても、当該の彼女の独自の存在の資質を表すことができるでしょうか。」

つまり、ここでオールポートは、心理学的ラベルが彼女の全体存在を説明することは不可能としており、そのようなラベルからぼろぼろと零れ落ちていってしまう彼女の存在が手紙からあふれ出している様を指摘しているのである。特定の個人や少人数の対象を、人工的な条件操作などしない、自然的な場面で詳しく観察し、時間経過に沿って変化する個々人の行動の特性を記述していく個性記述的方法（idiographic）をオールポートが主張した背景はここにある¹⁾。

それでも、本書の後半部分では、心理学に依拠したジェニーの解釈が惜しみなくなされる。ジェニーに関する全資料を手がかりにして、他者との比較をすることなく、ジェニーを説明するためのパーソナリティ理

論として、実存的アプローチ、深層アプローチ、構造-力動的アプローチが用いられ、ジェニーの理解と説明がなされる。

このような2部形式によって、読者はたちまちジェニーという女性の人生、彼女の生の在り方に惹き付けられ、具体的で独自の個への理解と接近に向かって走り出すことができる。そして、3つのそれぞれのパーソナリティ理論によって、ジェニーの人生が巧みに解釈、説明されることを目の当たりにすることになる。オールポートは、これらのパーソナリティ理論がジェニーの生を説明するのに不足していることを自覚しつつも、厚みのある深い解釈を施している。理論による説明からすると抜け落ちて行くジェニーの生き様。しかし、人はまた解釈をしなくては前に進めないかのように、ジェニーの人生の説明を求め、納得する。オールポートにとって、ジェニーの解釈は、そこから零れ落ちる彼女の人生を引き受けてしか成立しないことを痛みをもって語っているようである。オールポートは、本書のまえがきにおいてまた次のようにも述べている。

「パーソナリティ全般についての抽象的な議論をしている限り、心理学者は安全な立場にあります。本当の試練は個々の具体的な人生を説明（ないし指導あるいは治療）しようとするときにくるのです。ジェニーのケースを考えると、私は曖昧な一般化に逃避したいと望んでいる自分を発見します。しかし、いつも彼女は『それで私をどうしようというのです』という無言の挑戦によって私を釘付けにしてくれます。」

この挑戦は、オールポートに向けられるだけでなく、現代の心理学者に対してもいまだ突きつけられた挑戦である事実から、我々は目を背けてはならないのではないだろうか。このような問題意識から、本論では、1事例についての研究-事例研究法-について再考する。

2. 本論における目的

ここでのオールポートの提言は、言い換えれば、我々心理学者がいかにして自分の安全な立場を脱し、人間に関する抽象的議論ではなく、独自の個というものの理解を目指しうるかということについて問いを投げかけているといえるだろう。哲学に端を発する心理学の歴史のなかで、幾度となく問い直されてきたテーマ

ではあるものの、依然確固たる答えは出されてきていない。それぞれの研究者が自身の研究を追及するなかで折り合いをつけ、どこか後ろめたさともいえるようなものを抱えながらも、この大きすぎる問いを掘り下げていくことを回避しているようにすら見える。

筆者は、これまで「望む性」を生きようとするある1名の「性同一性障害者」当事者²⁾ならびに当事者のご家族（つまり、1家族）に、3年にわたり縦断的にインタビューを行い、異なる立場にある人々の視点から、「望む性」を生きることについてナラティブ・アプローチによる理解(narrative understanding)を試みてきた(湧井, 2006; 荘島 2007a, 2007b, 印刷中 a, 印刷中 b)。その人独自、そして家族成員独自の語りを、研究者との関係性のなかで、時間をかけて読み解き、研究者の視点から理解してきたのであり、いわば、徹底的に1事例(1人も1家族も単位としては1事例である)にこだわり続けてきたといえる。このような研究スタイルは、形式としては事例研究法として位置づけられる。

本論では、これまで筆者が行ってきた事例研究法について私なりの見解を打ち出したい。それによって、ともすると「客観性に欠ける」「一般化できない」といわれがちな1事例研究について説明を加えることが可能となるだろう。さらに、1事例研究に親和性を持つ質的でローカルなデータを扱う研究者に対しても、これまでになされてきた理解を超える別の視点を提供することが本論の目的である。

3. 事例研究法とは

事例研究法とは、「個体・事例を丹念に観察もしくは実験する研究スタイルの総体である」(サトウ, 2006a)。サトウは、事例研究について心理学史上に目を移し、Brocaの脳機能局在研究、Ebbinghausの記憶研究、Binetの知能研究、Pavlovの条件反射研究、Piagetの認知研究、Skinnerの行動分析、そしてAllportの人格研究まで含んだ「事例」の捉え方をしている。ここでの「事例」の意義は、一般法則追及的(nomothetic)な自然科学のあり方に抵抗することにより、1事例であれ、実験であれ、グラウンドな理論を拒否し、個体の行動を観察して記述を徹底することが重視される。

江馬(1970)は、統計的研究法と事例研究法を2つの調査方法を比較して、統計的研究法を「できるかぎ

り現象を数量化してとらえ、相互に比較し操作するのを容易にしてゆこうとするところから、その結果、研究の対象とする事象を、データとして固定させるために抽象化を極度にすすめ、そしてその抽出した単一の、もしくはきわめて少数の限られた側面について、厳密な測定をおこない、記録をとろうとするもの」(p.69)とし、それに比べて、「事例研究法とは、その抽象化をすすめながらも、事象の総合的な把握を考えようとするところから、全体関連的にできるかぎり多くの側面をとりあげて、測定ということよりも理解なり認識をすすめてゆこうとするもの」(p.69)としている。これら2つの調査方法においては、その抽象化のすすめ方について違いがあり、前者が「社会事象のなかから少数の側面をかぎって数量化し、そして厳密に、と志向せんとした」のに対し、後者は、「測定の対象とならずにきり捨てられた側面もふくめて、対象を構造化されたものとして把握せんと志向した」と指摘し、すでに問題とする方向性が異なっていることを指摘する。

細木(1968)は、事例研究法の実践的意義をさらに推し進め、「人間に関する諸問題を、具体的な個人について、一般の中に位置づけながら、多面的に分析し、系統的総合的に理解把握し、個別的具体的に問題解決の処理を立案すること」と定義する。この定義においては、具体的な個は、研究者の視点から普遍という一般の中に位置づけられ、それは問題解決を志向するための一助となる。事例研究の有効性は、臨床心理学では古くから臨床家に受け入れられている。それは、「一つの症状について何例かをまとめ、それについて普遍的な法則を見出すような論文よりも、一つの事例の赤裸々な報告のほうが、はるかに実際に役立つ」(河合, 1976)という実感に基づいている。そして、新たな事例のプロセスから詳しいデータを収集し、収集されたデータの分析から、何らかのパターン、構造仮説、理論モデルなどを生成することを試みるタイプの研究法(斎藤・岸本, 2003)が生み出されるとされる(ここでの事例研究は、大量データ収集前のワンステップとされていることに留意したい)。

社会学では、水野(2000)が、ある特定の《個人》をその人なりの特徴を持った存在として成り立たせているものが何なのかを明らかにするという関心のもと、その疑問を自分自身にとってリアリティ(現実感)の

ある形で(水野いわく、「思弁的(speculatively)ではなく経験的に(empirically)」、把握しようとしたときに、いったんは研究対象として個人現象を設定して、具体的な素材に即して把握していくというやり方を推奨している。「事例媒介的アプローチ(Case-Mediated Approach)」と呼ばれるこの方法の特徴として興味深いのは、分析対象が公刊されている有限素材に意識的に限定されているという点であろう。例えば、中野卓編・著「中学生のみた昭和十年代」(1989)、S.フロイト「エリザベート・フォン・Rの症例」(1985)、笠原嘉編「ユキの日記」(1978)などが事例媒介的アプローチの分析対象とされる。水野(2000)は、この理由に「対象素材の分析・解釈を行おうという気のある者には誰にでもその参入が可能な(=誰でも分析・解釈の切れ味を競い合える)仕組みを確保しておきたいという思い」と「分析・解釈の多様性をめぐる問題とどう向き合うかという問い」が関係しているという。

ここでみてきたように、一口に事例研究法といっても、その役割や意義は、学問領域によっても、個々の研究者によっても異なることが明らかである。というのも、そもそも、「1事例」が指すものも、1人の人間の反射行動なのか(これは1個体に対して繰り返し測定を行うものである)、ある1人のインタビューデータ(実際、これらのデータからは、個人の自己・アイデンティティや人生の意味が抽出される)なのか、臨床の1ケースなのか(治療者と患者という特殊な関係において、本質的に1回限りのものである)、1人の人間を取り巻くシステムや状況なのか(インタビュアーや解釈者がそのシステムに盛り込まれていると考えられる)、1フィールド(例えば、保育園など、いろいろな立場にある者が集まる場であり、そこで起きる状況は1回限りのものである)なのか、はたまた水野(2000)のいう公刊されている有限素材なのか、それすらも定義されないままに事例研究法について漠然とその意義が問われているからであろう。しかし、 $N=1$ の「1」のあり方、捉え方いかんによって、その研究が持ちうる学問的意味は、大きく変わりうる。

この点について、Brunswilk(1965)は、サンプリングの問題と絡めて、「事実、最終的には、状況や問題の適切なサンプリングが、適切な被験者のサンプリングよりも重要である」(p.39)と指摘している。では、この

学問的意味とは一体どのような点にあるのだろうか。

4. 事例研究の学問的意味

これまで、科学的心理学という観点からは、「事例研究とは、探索的研究（パイロット・スタディ）、すなわち仮説を導くための手段」と位置づけられてきた（吉村, 1989）。例えば、パブロフが、単一事例による検討を行い、学習心理学の基本的的方法論を確立した際には、「彼の基本的研究法は、単一の有機体からデータを収集し、他の有機体に繰り返すことによって見解を強めるというものであった」という（Barlow & Hersen, 1984, 吉村（1989）より引用）。また、無意味綴りの考案による記憶研究において、自らが被験者となり、そのデータに基づいて法則性を追及したエビングハウスは、「テストはすべて私自身を被験者として行われたものであるから、本来、個人的な意義しかもたないものである。しかし、だからといって、私という精神的組織体の特徴だけしか反映していないということにはならない。たとえ発見された絶対値は1人の個人に関するものとしても、それらの数値の相互の関係や関係の関係には、一般的妥当性をもった多くの関係が見いだされるであろう」（Ebbinghaus, 1978）と、述べている。彼らの見解では、1事例で得られたデータは仮説として扱いこそはしないものの、その後統計的検討に付される宿命にある点では、やはり探索的研究といわざるを得ない。また、計量可能な客観的行動しか直接的データと見なさないこれらの事例研究は、吉村（1989）も述べているように、「事例研究法の意義を積極的に評価しようとする研究者にとっては、心理機能のうち大切なものを切り捨てた研究法と映り、やはり物足りないもの」なのである。

1事例研究の典型として、異常例研究、希少例研究があることを忘れてはならないだろう。これらの研究は、希少例であるからして、1事例としての学問的意義を発揮する。サトウ（2006a）は、この点について、「もとより、異常と正常の違いを量的に理解するか質的に理解するかという問題もある。量的な差異にすぎないのであれば、異常例の検討はそのまま他の人々の理解に役立つ。一方で、質的な差異があるならば人類全体の多様性を受け止めることにつながる」と、述べている。Dukes(1965)は、N=1研究が学問分野（発達・

動機・感情・知覚・学習・思考と言語・知能・パーソナリティ・メンタルヘルスとサイコセラピー）においてどのくらい実施されているかを調べた（1939年—1963年の間の研究をまとめたもの。表1はDukes（1965）から、Table1. Total Distribution of N=1 Studies（1939—1963）の一部を引用したものである）。40年以上も前の研究をまとめたものであるが、ばらつきの比率は参考になると思われる。

表1 N=1研究のばらつき（Dukes, 1965）

カテゴリ	研究の量
Maturation, development	29
Motivation	7
Emotion	12
Perception, sensory processes	25
Learning	27
Thinking, language	15
Intelligence	14
Personality	51
Mental health, psychotherapy	66
Total	246

表1から、メンタルヘルスおよびサイコセラピーの分野におけるN=1研究が他の分野と比較して、2倍以上の論文が生産されていることが分かる。このことは、先述したように、臨床心理学における事例研究の有効性が古くから認められてきていることの証だろう。おそらく、N=1の「1」の捉え方が、探索的研究のなかで客観的に捉えられる直接データとしての「1」と、臨床心理学領域における「1」とでは、大きく異なるものである。臨床心理学領域における「1」には、1ケースのように時間的経過をすでに含んでいるものであったり、また、1つの状況というときには、人が環境と相互作用するシステムとしての意味を持つものであったり、また1人の物語・語りには、語る者の声だけではない多声性が孕んでいる（Bakhtin, 1974）。N=1の「1」は、対象となる人数だけをみれば「1」に過ぎないが、そこで扱われることは客観的な「1」という数値には収

まりきらないものである。一方で、探索的研究における「1」は、客観的な数値としての「1」であり、それは、「1」の背後にある母集団を想定している。では、母集団を想定しない「1」とは何を意味しているのだろうか。そして、我々はそのような「1」のあり方を、研究の中でいかに捉え、扱うことが可能なのだろうか。

5. 1 事例研究における「1」の意味するもの

サトウ(2006b)は、心理学研究の事例研究において、代表性が問われる問題について、こうした問題を生産的に回避し、新たな認識を作る試みとして、人間を外界との相互交渉を行いながら常に自分(システムとしての自身)を更新していくオープンシステムとして捉え、時間と共に変化していく人間について描くことを目的とした方法論を紹介している。質的心理学、分化心理学の新しい方法論である複線経路等至性モデルは、個人と環境の関係を複数の道筋の中に記述することを基調としている。このような考え方をすると、N=1の「1」は、客観的な数値としての1を超越し、時間軸・空間軸の2つの軸において多次的に位置づけられる。吉村(1989)も、「事例研究では1被験者しか取り上げない。そのことは、ひっきょう、その被験者を多面的状況で捕らえようとする態度へとつながる。したがって、得られた見解は、あるいは生じた行動は常に状況と関連付けて理解されることになる。しかも、それは時間を追っての検討となる。(中略)また、この立場は、人間性心理学での“全体性”の重視と趣旨を同じくするものである」と述べている。

つまり、ここで「1」とは、外界との相互システムにおける「1」であり、さらに時間とともに変わりゆく「1」であり、多面的、多次的、多軸的に捉えることが可能である。「1」のあり方は、むしろ「1」の中にある非「1」の存在を逆説的に照射している。それらが同時併存して「1」をその瞬間瞬間に構成しつつあるのである。このような「…しつつある」「1」という複雑な変化の様相を、我々は捉える努力をしなければならない。

ジェニーの手紙のなかのジェニーの声は、本来「1」では収まりきらないジェニーという人間を理論的解釈によって、内的整合性を持たされ、「1」の中に収められることを拒否しているようにも聞こえる。ある1つの解釈によって筋道立ったジェニーの理解をしたかと

思うと、同時にその解釈から逸脱するジェニーの姿が否おうに我々の中から生まれ出してしまうのである。

6. 1 事例研究の目的

1 事例研究を行う目的として、杉村(2004)は、2つの目的を掲げる。1つは、事例の特殊性・個別性に焦点を当て、個性記述をめざすことであり、もう1つは、個性記述を通して、新しいアイデアの抽出、仮説生成、モデル構成などを行い、一般化をめざすことである。これらは、目指すところが違っても、個人の行動間の連関や、行動や心理現象が生起するメカニズムを明らかにしようとする点で、両者の目的は一致し、これらが事例研究の利点であるという。一般化を目的とする背景には、やまだ(1986)の主張する現場(フィールド)心理学におけるモデル構成がある。その意味するところは、「特定の現場に根ざすローカリティをもちながら、他者と共有できるような一般化」を行うものであり、質的なデータからモデル(理論・仮説)を構成することが目指される。ちなみに印東(1973)によれば、モデルとは「関連ある現象を包括的にまとめ、その一つのまとまったイメージを与えるようなシステム」を指す。やまだ(1986)は、質的なデータが、記述や解釈を行うだけでは不十分であるとし、現象のよりより理解には、なんらかのモデル化(理論化)が必要であると強調する。

事例媒介的アプローチを提唱した水野(2000)は、このアプローチのサブ・タイプに、「現象把握型」と「モデル構築型」の2つを区別した。現象把握型とは、特定の個別事例に見られる現象の把握に向けられるものであり、ある個別事例の内に読み取れる範囲内でのみ主題の探求がなされる。もう一方のモデル構築型では、複数事例の比較を通じてのモデル構築が研究目標となる。モデル構築型は、個別事例の説明が前提にあるものの、複数の事例間の相互比較を通じて、特定の手段に関連した形で抽出されるモデルの構築がより重視される。事例媒介的アプローチにおける事例の分析作業には2つの段階がある(水野, 2000)。第1段階は、「データのなぞり局面」と呼ばれ、個別事例や素材への密着が重視される局面である。この段階では、対象となる事例や素材を何度もなぞり、なぞり返す作業(tracing and retracing)が行われ、問題の事例や素材への理解が

深められる。第2段階は、データからの距離をとることが重視される《データの突き放し》の技法が動員される。この段階では、比較や対照などの論理を駆使し、対象事例に由来する発想に親和的な思考様式へのとられから距離を取ることが試みられる。ここで水野は、《突き放し》について、それがどの程度の距離を意味するのか説明をしていない。

1 事例研究ではないが、M-GTA (Modified Grounded Theory Approach) の創始者である木下 (2003, 2007) は、データを解釈して概念を生成する際には、「一定の距離」が必要であり、目の前にあるデータだけではなく、他の具体例も説明できるであろう概念を考えなければならないという。ある程度の抽象性を持つからこそ、それが研究する人間の解釈として認められるという。再び、話を水野の事例媒介的アプローチに戻すと、水野の場合は扱う事例が公開された有限素材であるため、その解釈がどれほど生の事例から突き放され、距離が取られているのかが明らかな点で、他の読み手が水野の解釈に反駁することも可能であり、また別の解釈をも許容することが可能となっている。

臨床実践における事例研究をみてみよう。臨床心理学においても事例からモデル構成を目指す立場がある。斉藤・岸本 (2003) は、事例研究を「一事例についてのプロセスから詳しいデータを収集し、収集されたデータの分析から、何らかのパターン、構造化説、理論モデルなどを生成することを試みるタイプの研究法」であるという。ここでの理論モデルという言葉は、斉藤 (2003) によれば、実践の中で刻々と体験される現象から、帰納あるいは連続比較などの方法論によって生成、継承される、現場のコンテキストに密着した理論と言ひ換えられ、このような理論こそが臨床知として重要であると斉藤は主張する。

一方、鯨岡 (2005) は、自分の存在や関わりを含む現場における人の生き生きとした姿や現場が直面する人の生のありよう、すなわち「生の断面」を描き出そうとして、エピソード記述を方法論として確立した。生の断面に現われた1つのエピソードは、関わり手に立ち上がった問いとの関連において多元的な「意味」に向かうのだという。そして、一般的・普遍的な事実の提示から、読み手に起こり得る可能的真実を提示することで、従来の客観主義や実証主義が採用する一般

性・普遍性の提示の仕方乗り越えようとしている。

「一つのエピソードを一つの実事として提示するとき、前項でみたように、もしもそれが読み手に自分の身にも起こりうることとして理解されるなら、つまり過去に同じような経験をもったかどうかには必ずしもこだわることなく、それはありうることとして理解されるなら、それはエピソード記述に固有の実事の提示の仕方として認められるべきだということです。これは、私たち一人ひとりが自分の経験世界に閉じられていないこと、他者の経験世界に可能的に拓かれていることに拠っています。つまり、身体的には類的同型性を持ち、それゆえ感受する世界はかなりの程度同型的であることを基礎に、幾多の類似した経験をもつ私たち人間は、絶対の個であると同時に類の一員であり、それゆえ大勢の他の中の一人でもあります。しかも、豊かな表象能力を付与されている人間は、その想像力によって、他者に起こったことはそのようなかたちで我が身にも起こる可能性がある」と理解することができるのです」(p.45)。この鯨岡の主張は、エピソード記述が読み手の開かれた可能性や身体的な感受世界に訴えかけるものであることを示している。

7. 事例研究による「1」の多次元的理解

ここまで、いくつかの事例研究の目的を概観した。それらは、鯨岡を除き、どちらかというモデル構成、概念・パターン・構造の抽出に重きが置かれているようにみえる。1 事例から理論や仮説モデルを構成したり、データや概念を抽出するという目的は、眼前にある混沌とした現象をより理解し、説明することにあり、さらに構築されたモデルは現場に戻して実践に応用される。

鯨岡のエピソード記述や本論冒頭で紹介したオールポートによる「ジェニーの手紙」の場合は、エピソードや手紙を通して、我々の身体に訴えかけ、心を強く揺さぶられるような体験そのものを重視しているもとれる。そこでは、平々凡々と映っていた現象に裂け目が生じ、その裂け目から全く新しい世界が垣間見えるような体験を読み手が味わうことで、世界の見方の転換を図っている。このようなエピソード記述の特徴において、関わり手ないし読み手への事例が持つ侵襲性は高いまま保持されている (つまり、モデル構成は

行わない)。また、臨床心理学における症例報告においても、河合・佐治・成瀬 (1977) が、「セラピストとクライアントの関係も全部含んでのケース」を個々に書き進めていくと、全体としてのゲシュタルトが出来てきて、それが普遍性をもつのではないかという言い方もしている。

一方、モデル構成を目指す事例研究は、目の前の事例をなぞりつつも、分析をする際に、また分析することによって、いったん具体的なデータから距離をおき、突き放しを行ったうえで、場合によっては事例以外の状況をも包括しうる理論、仮説、概念モデルをデータからボトムアップに、そして既存の理論からトップダウンにと、双方向から構成していく。

両者の立場は、その抽象化の程度においては、異なる方向性を歩んでいるように見える。エピソード記述や手紙が具象レベルに近いとすると（とはいえ、鯨岡のエピソード記述においても理論とのすり合わせは重要なステップであり、単に関わり手が気になったエピソードを記述しているわけではない。しかし、モデルとして抽象しない点において具象と判断した）、モデル構成の立場は、当然抽象の程度は高くなる。やまだ (2002) は、あらゆる現象に適用できる代わりに現実とは乖離する抽象的モデルではなく、また無限に多様な具体的現実を個々の写實的に写し取る具象モデルではなく、具体的現象をできるだけ単純化しながら具体性を保持するための必要最小限の有意味情報を含むモデルとして半具象的図像モデルを提起しているが、記述よりもモデル化を重視していることについてはすでに述べた。しかし、記述にせよ、モデル構成にせよ、研究者ないし対象者への関わり手からみた解釈の作業が入り込むことは共通している。さらに、そのようにして書かれたものに、個々の立場にある読み手が参入し、河合 (1977) の言葉でいうならば、別のゲシュタルトを發展させ、個々人にとっての有意味性を持ちうる新たな世界や視点を獲得するのである（やまだ (2002) は、半具象的モデルの特徴として「イメージからイメージへの比喩的移行や生成的増殖を生みやすいことにある」と言及している）。サトウ (2006a, 2006b) は、転用可能性という言葉を用いて、事例報告が他の読み手に有用な意味が生じる事態を説明している。

葛西 (2005) は、モデル構成研究において、相互に

異なる部分をもつ複数のモデルが並び立つ「モデルの多重併存事態」が現象のよりよい理解を促進し、さらには「モデルの多重併存事態」を全体的に統括しうるいわば「上位モデル」をもたらす可能性について議論し、研究の1つの方向性として指し示した。研究という行為もまた、関わり手と相手との相互システムにおいて時間と共に変化しうるものであり、また、読み手の参入もあいまって、多次元的な理解の可能性と、モデルの生成的増殖、転用が望まれると結論付けられよう。エピソード記述が目指すように、直接的に読者の世界に裂け目と呼び起こすことも含まれる。それは、次の違いこそあれ、向かおうとする場所は同じであるように感じられるのである。

7. まとめと課題

本論では、オールポートの提言から始まって、1 事例研究を再考すべく、論を展開してきた。ここからいえることは、従来の科学心理学で目指された普遍性とは、世界は常に変わらないというまさに「不変」神話を作り上げる営みだったのではないだろうか、ということである。しかし、実際には、みなが実感しているように、人が生きている世界は矛盾に満ちている。矛盾に満ちながらも、ダイナミックに1つの世界を構成し続けているのである。ありうる可能世界の提示、そして可能世界が多重に併存する世界を、1 事例研究によって映し出せるに違いない。これからも「1」の多次元的世界を理解することの魅力を伝えていきたい。

注

- 1 個性記述という概念は、Windelband によって自然科学における法則定立的概念に対して、歴史科学は個性記述的方法であるべきとする文脈のなかで用いられた。事象の一回性、現前性を強調する Windelband の主張は、事例研究法の価値の有力な根拠とされている。
- 2 性同一性障害とは、生物学的な性別と自分自身の性自認の間に食い違いが生じ、何らかの「障害」を感じている状態。「性同一性障害」と鍵括弧で括っているのは、筆者の研究協力者が、時間の経過に伴って自らを「性同一性障害者」と名乗らなくなったことによる。

文献

- Allport, G. W. (1982). ジェニーからの手紙—心理学は彼女をどう解釈するか. 青木考悦・萩原 滋 (訳). 新曜社.
- Bakhtin, M. M. (1974). ドストエフスキイ論. 新谷敬三郎 (訳). 冬樹社.
- Barlow, D. H. & Hersen, M. (1984). Single case experimental designs. 2nd ed. New York: Pergamon Press.
- Brunswilk, E. (1965). Perception and the representative design of psychological experiments. Berkeley: University of California Press.
- Dukes, W. F. (1965). N=1. Psychological Bulletin, 64, 74-79.
- Ebbinghaus, H. 1978. 記憶について. 宇津木 保・望月衛 (訳). 誠信書房.
- 江間成也. (1970). 事例研究法序説. 宮城教育大学紀要, 4, 67-77.
- 細木照敏. (1968). 臨床心理学におけるケース研究. 臨床心理学講座 1. 臨床心理学の基礎. 黎明書房. 291-293.
- 印東太郎. (1973). 心理学におけるモデルの構成. 印東太郎 (編). モデル構成. 東京大学出版会. 1-28.
- 葛西俊治. (2005). 解釈的心理学研究における理論的基盤とアブダクションに基づくモデル構成法. 札幌学院大学人文学会紀要, 78, 1-26.
- 河合隼雄. (1976). 事例研究の意義と問題点—臨床心理学の立場から—. 臨床心理事例研究. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要, 3, 9-12.
- 河合隼雄・佐治守夫・成瀬悟策. (1977). 臨床心理学におけるケース研究. 臨床心理ケース研究 1. 誠信書房. 231-254.
- 木下康仁. (2003). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂.
- 鯨岡 峻. (2005). エピソード記述入門—実践と質的研究入門. 東京大学出版会.
- 水野節夫. (2000). 事例分析への挑戦—“個人”現象への事例媒介的アプローチの試み. 東信堂.
- 斎藤清二・岸本寛史. (2003). ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践. 金剛出版.
- サトウタツヤ. (2006a). 事例研究法. 二宮克美・子安増生 (編). パーソナリティ心理学(キーワードコレクション). 新曜社.
- サトウタツヤ. (2006b). 発達の多様性を記述する新しい心理学方法論としての複線経路等至性モデル. 立命館大学研究, 12, 65-75.
- 荘島幸子. (2007a). ある性同一性障害者の自己構築プロセスの分析—同一トランスクリプトによる知見の羅生門的生成. 京都大学教育学研究科紀要, 53, 206-219.
- 荘島幸子. (2007b). 物語論アプローチへの《語り得ないもの》という視点導入の試み. 心理学評論, 49(4), 655-667.
- 荘島幸子. (印刷中 a). トランスジェンダーを生きる当事者と家族: 人生イベントの羅生門的語り. 質的心理学研究.
- 荘島幸子. (印刷中 b). 「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程: 自らを「性同一性障害者」と語らなくなった A の事例の質的検討. パーソナリティ研究.
- 杉村和美. (2004). 事例研究. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ. (編). 質的心理学—創造的に活用するコツ. 169-174.
- 湧井幸子. (2006). 「望む性」を生きる自己の語られ方: ある性同一性障害者の場合. 質的心理学研究, 5, 27-47.
- やまだようこ. (1986). モデル構成をめぐる現場心理学の方法論. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 25, 31-51.
- やまだようこ. (2002). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス. 質的心理学研究, 1, 107-128.
- 吉村浩一. (1989). 心理学研究における事例研究法の役割. 心理学評論, 32(2), 177-196.

(博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)